



# この一冊

Vol. 95



会員 工藤 英知 (50期) ●Hidetomo Kudo

この本を私が初めて読んだのは、高校2年生(昭和59年)の夏休みでした。自分からこの本を選んだわけではありません。たしか現代国語のN先生が夏休みに出された課題図書でした。当時、この本を読んで、自分とは何か、自我を初めて自覚させられました。今でも「この一冊」と思える本です。

「されど われらが日々——」は、昭和39年第51回芥川賞受賞作品です。昭和30年前後の学生運動のころを時代背景とした小説です。私が生まれる前の時代で、私はこの学生運動の時代や考え方をよく知りません。また、友人と、この時代や学生運動のことを深く話題にすることも殆どありません。この時代を知っている方からこの時代について、じっくりとお話を聞かせていただけたらと思っているくらいです。ですので、この小説の本当の意味を分かっているかとは思いません。それでも、人生について、自分の存在について、初めて哲学的なことを自覚させられ、考えさせられた小説でした。

この小説は全体のストーリーとしても考えさせられますし、いたる所に考えさせられる箇所があります。例えば、

## 『されど われらが日々——』



柴田 翔 著  
文春文庫  
583円(税込)

主人公の婚約者節子が主人公宛に書いた手紙の中に、次のような一節があります。「佐野さんの遺書が私の手にもたらされた夜、私がその遺書を開いた時、その中の「死に臨んで、自分は何を思い出すか」という問いは、木の肌に打ち込まれるのみのように、私の心に突きささりました。それはあたかも私に向けられた問いであるかのようにでした。そして、それへの答えを探した時、私は自分がそのおそろしい問いへのどんな答えも持っていないこと、持っているはずのないことを理解しました。そして、それと同時に、私は自分から去ろうとしない疲労感の意味を知ったのです。」

青臭さバタバタだと評され

る方もいらっしゃるかもしれませんが。ただ、私は学生時代にこの小説を読んで、「自分とは何か」「人生をどのように生きるべきか」と大上段に構え、大真面目に考え、思い悩んだのです。その後、仕事をするようになり、日々の生活・仕事に追いかけてられました。そのような日常の中では、このようなことをゆっくり考える時間も余裕もなくなりました。このような問題に悩まないですむということは、それはそれで幸せなことだったのかもしれませんが。いくら考えて思い悩んでも、これで納得、というような答えは出なかったです。せいぜい自分らしく生きようとか、毎日一生懸命生きようとか、抽象的な答えしか思いつきませんでした。しかし、逆に、人生の問題を考えずに日々生活することは、限りある人生を無駄に生きていることなのかもしれません。なので、答えが出なくとも、自分の人生について考えること自体が意味のあることなのだと思います。そういうことを考えさせる一冊です。

十年後二十年後に、また読みたいと思います。 ■